

上伊那における推量助動詞：ダラの分布

著者	中村 純子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 10: 1-13(1999)
発行年月日	1999-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022422

上伊那における推量助動詞-ダラの分布

中村純子

1. はじめに

上伊那地方¹⁾ (地図1、2参照)では共通語の「だろう」に対応する推量の助動詞として、特色ある方言形式の-ズラ、-ラが使用されている。更に新しい方言形式、-ダラが愛知県、静岡県から北上してきている²⁾。-ダラの使用域については、馬瀬(1980、1992)が1971年から1973年にかけて、上伊那地方の4つの地域、中川村片桐(上伊那南部)、伊那市富県(上伊那中部)、長谷村非持山(上伊那東部)、辰野町小野(上伊那北部)で重点的に記述的研究のための調査を行っており、以下のように報告している。

-ダラは南信地方では南部から北上を続け、若年層では重点調査地点をとれば上伊那地方中川村片桐、伊那市富県、長谷村非持山でも用いるに至る(1992:548)。

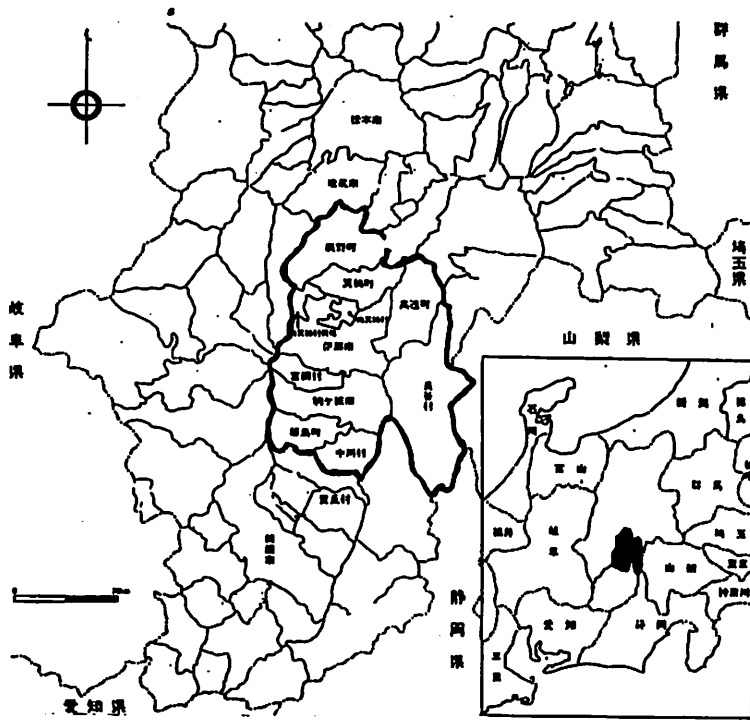
-ダラは1971年から1973年の時点で上伊那地方の3つの地域、中川村片桐、伊那市富県、長谷村非持山で使用されていたことが分かる。この時点では、もう1つの重点調査地点である辰野町小野では使用が報告されていない。

馬瀬(1980、1992)の調査から20年以上経た今日、-ダラは更に壮年層、若年層と年代的使用層を広め、また辰野町小野へと地理的にも分布を広めつつある。それとともに-ズラが衰退している。江端(1977:12~13)は-ズラと-ダラの交代の要因の1つとして、承接法が似ていることを指摘しているが、上伊那では承接法が重ならない地域もある。

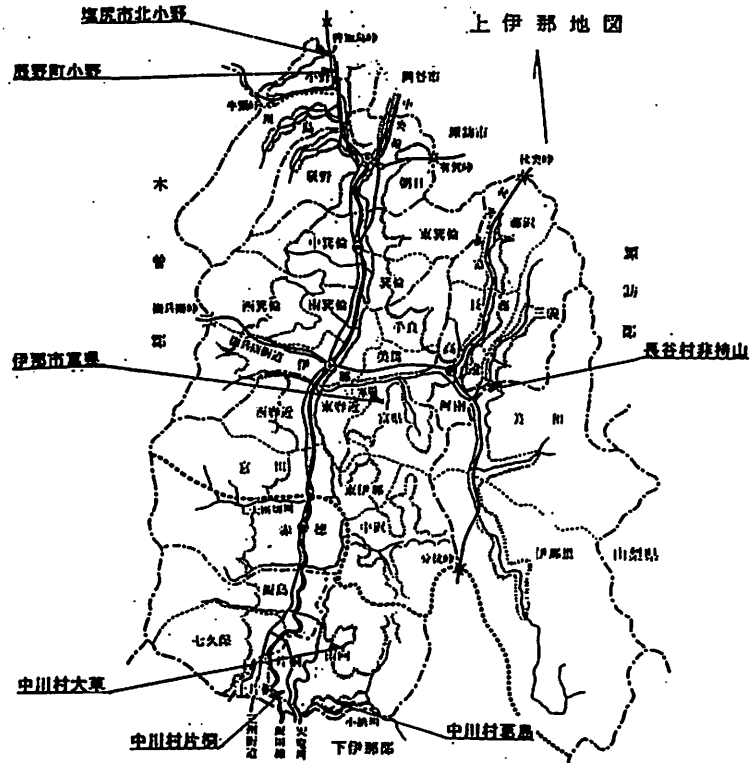
本論の目的は現在の上伊那地方における-ダラの分布を、承接法を考慮に入れて明らかにすることである。

2. 下伊那地方の-ダラの分布

【地図 1】



【地図 2】



伊那地方における-ダラの分布の調査は上伊那と隣接する下伊那において今村（1990：85～67）が行なっている。今村はまず、1985年に下伊那全域で高年層男子（60才以上）と若年層男女（中学3年生）を対象に言語地理学的調査を行ない、-ダラがほぼ下伊那全域に分布していることを確かめた（言語地図「-ダラの分布」参照）。更に1988年に下伊那郡豊丘村方言の推量形式について若年層男女と高年層男女の2世代調査を行なった。

下記の表は今村（1990）から引用した。【表1】は「きっと明日は雨だろう」、【表2】は「たぶん高いだろう」を何というかという質問の結果をまとめたものである。なお、筆者が後述の表3～6と比較しやすいように表1、2の高年層男性/高年層女性（高・男/高・女）と若年層男性/若年層女性（若・男/若・女）を入れ代えて記してある。また、-ダラの列が分かりやすいように網かけをした。

【表1】 下伊那郡豊丘村方言 体言接続

1.03	アメズラ	アメダラ	アメダロー	計
高・男	79.4	8.8	11.8	100%34名
高・女	78.4	16.2	5.4	" 37名
若・男	2.3	79.1	18.6	" 47名
若・女	2.0	90.0	8.0	" 50名

「雨だろう」 今村（1990：82）を引用。

【表2】 下伊那郡豊丘村方言 用言接続

1.04	タカイ ズラ	タカイ ンズラ	タカイラ	タカイ ンダラ	タカイ ダロー	その他	N.R.
高・男	17.7	23.5	44.1	2.9	5.9	0	5.9
高・女	0	43.2	40.5	10.8	5.4	0	0
若・男	0	0	65.1	25.6	7.0	2.3	0
若・女	0	2.0	72.0	20.0	6.0	0	0

「たぶん高いだろう」 今村（1990：80）を引用。

これらの表から下伊那地方は体言接続には高年層は-ズラを、若年層は-ダラ

を主として用いているのが分かる。用言接続では、高年層は-ラと-ンズラを主として使用している。若年層は-ラを主として使用するが、-ンダラも使用している。

3. 上伊那方言の-ダラの分布

3.1 -ラ、-ダラ、-ズラの承接

上伊那地方では、馬瀬（1980）によると-ラは動詞、形容詞の終止・連体形に接続する。また、-ダラは動詞、形容詞、形容動詞、体言及びある種の副詞に接続する。ただし、活用語のうち、動詞、形容詞には形式名詞、「ン」を介してその終止・連体形に、形容動詞は語幹に接続する。つまり、-ダラは体言及び体言格の語句に接続する。-ズラは-ダラと同様、体言及び体言格の語句に接続するが、用言の終止・連体形に直接接続する用法もある。ただしこの点に関しては地域、年代によって異同があるようである。また、馬瀬（1980：210）によれば、「ン」を介して-ズラにつながる用法は新しいものであるという。-ンズラは1971年から1973年の調査の時点では中川村片桐、伊那市富県、長谷村非持山では使用が報告されているが、辰野町小野では使用が報告されていない。

-ダラにおける体言接続、形式名詞「ン」を介した用言接続の用例3)を以下に示しておく。

(1) 「体言+ダラ」の用例（1F・飯島町出身、7F・辰野町出身の会話）

↓は上昇調↑は下降調を表わす。

7F：～ タツノッテサ チューブニ ハイルノ↑ ナンプニ ハイルノ↑

1F：タツノ ドコニ アルノ↑

7F：シラナイ（笑）

1F：エ ダッテ イージマデ

7F：ン

1F：イナデ

7F：ン

1F：タツノデ

7F：ソーダヨ↑

1 F : ツギワ↑ デッカイ トコ
7 F : オカヤ
1 F : オカヤ↑
7 F : スワ
1 F : スワ↑
7 F : ウン
1 F : ホンナラ モー チューブダラ↓

(2) 「用言+ンダラ」の用例

1 F : ウン デモ アノ ヘンノ トマル トコサー ホントニ タカイジャン (中略)
7 F : ウン ダカラ チョット トークニ トマレバ イーノ
1 F : ヤスカッタ↑
7 F : ウン
1 F : イクラダッタ↑
7 F : シー ナイショ
1 F : タカインダラ↓
7 F : ン タカクナイヨ ベツニ

3.2 聞き取り調査の概要

上記の承接を考慮に入れて、「体言+ズラ」、「体言+ダラ」、「用言+ラ」、「用言+ズラ」、「用言+ンズラ」、「用言+ンダラ」の接続の形での使用の有無を地域別、年代別に聞き取り調査した。調査の概要は以下の通りである。

1. 調査日時 1998年9月～11月
2. 調査場所 中川村 (片桐、葛島、大草)、伊那市富県、長谷村非持山、辰野町小野 (塩尻市北小野も含む。辰野町小野に隣接しており、学区も一緒のため、辰野町小野の調査地として採用した。) 調査場所の選択は馬瀬 (1980、1992) に倣った。
3. 被調査者 若年層 (15才前後)、壮年層 (40才前後)、高年層 (70才前後) 各2～4名 (詳細は後述)
4. 調査方法 アンケートをもとにした聞き取り調査 (詳細は後述)

5. 調査者 中村純子

3.3 調査結果と考察

以下の質問例に対しての調査結果を表3～6と言語地図「-ダラの分布」にまとめた。

質問例 次のような言い方をしますか。

「明日は雨ずら」（体-ズラ）／「明日は雨だら」（体-ダラ）

「明日は雨が降るら」（用-ラ）／「明日は雨が降るずら」（用-ズラ）

（汗をかいている友人に）「暑いんずら。窓を開けようか」（用-ンズラ）

（汗をかいている友人に）「暑いんだら。窓を開けようか」（用-ンダラ）

表3～6は方言推量助動詞の各承接の使用の有無を年代別に示したものである。表3は中川村各地、表4は伊那市富県、表5は長谷村非持山、表6は辰野町小野における結果である。

【表3】中川村各地における推量助動詞の承接

	被調査者	体-ズラ	体-ダラ	用-ラ	用-ズラ	用-ンズラ	用-ンダラ
1	高男 (75) <片桐>	○	○	○	○	○	×
2	高女 (74) <葛島>	○	×	○	×	○	×
3	高女 (70) <大草>	○	×	○	×	○	×
4	壮男 (40) <片桐>	○	○	○	×	○	○
5	壮男 (38) <葛島>	×	○	○	×	×	○
6	壮女 (36) <片桐>	×	○	○	×	×	○
7	若男 (15) <葛島>	×	○	○	×	×	○
8	若男 (14) <大草>	×	○	○	×	×	○
9	若女 (14) <大草>	×	○	○	×	×	○
10	若女 (14) <片桐>	×	×	○	×	×	○

・高男／高女（高年層男性／高年層女性） 壮男／壮女（壮年層男性／壮年層女性）

若男／若女（若年層男性／若年層女性）

・（ ）年令 < >地域名 ○使用 ×使用しない △分からない 以下同じ

【表 4】伊那市富県における推量助動詞の承接

	被調査者	体-ズラ	体-ダラ	用-ラ	用-ズラ	用-ンズラ	用-ンダラ
11	高男 (64) <貝沼>	○	×	○	×	○	×
12	高女 (76) <貝沼>	○	×	○	×	○	×
13	高女 (72) <貝沼>	○	×	○	△	○	×
14	壮男 (49) <貝沼>	○	×	○	×	○	×
15	壮女 (41) <貝沼>	×	○	○	×	×	○
16	壮女 (40) <貝沼>	×	○	○	×	×	○
17	若女 (17) <貝沼>	×	○	○	×	×	○
18	若女 (17) <貝沼>	×	○	○	×	×	○

【表 5】長谷村非持山における推量助動詞の承接

	被調査者	体-ズラ	体-ダラ	用-ラ	用-ズラ	用-ンズラ	用-ンダラ
19	高男 (72) <非持山>	○	×	○	○	○	×
20	高男 (64) <非持山>	○	×	○	×	○	×
21	高女 (66) <非持山>	○	×	○	×	○	×
22	壮男 (49) <非持山>	○	○	○	○	○	○
23	壮男 (45) <非持山>	○	○	○	×	○	×
24	壮女 (44) <非持山>	×	○	○	×	×	○
25	壮女 (44) <非持山>	×	○	○	×	×	○
26	若男 (15) <非持山>	×	○	○	×	×	○
27	若男 (15) <非持山>	×	×	×	×	×	×
28	若女 (14) <非持山>	×	○	○	×	×	○
29	若女 (14) <非持山>	○	○	○	×	○	○

【表 6】辰野町小野における推量助動詞の承接

	被調査者	体-ズラ	体-ダラ	用-ラ	用-ズラ	用-ンズラ	用-ンダラ
30	高男 (75) <北小野>	○	×	○	○	×	×
31	高男 (73) <辰小野>	○	×	○	○	○	×
32	高女 (70) <辰小野>	○	×	○	○	○	×
33	壮男 (44) <辰小野>	○	○	○	○	○	×
34	壮男 (39) <辰小野>	×	○	○	×	×	○
35	壮女 (36) <辰小野>	○	○	○	○	○	△
36	壮女 (35) <辰小野>	○	×	○	○	○	×
37	若男 (14) <北小野>	×	×	×	×	×	×
38	若男 (14) <北小野>	×	○	○	×	×	○
39	若女 (15) <辰小野>	○	○	○	×	○	○
40	若女 (14) <辰小野>	○	○	○	○	○	○

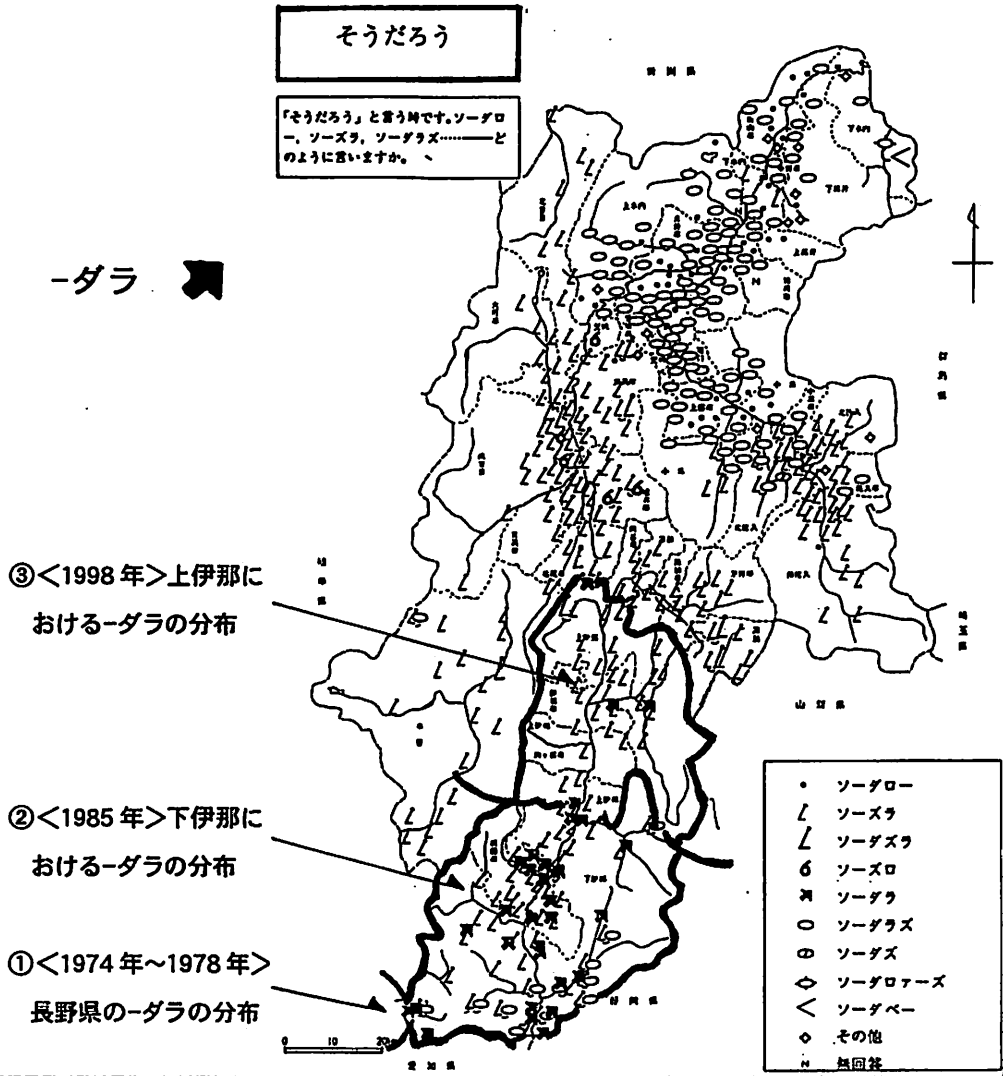
<北小野>塩尻市北小野 <辰小野>辰野町小野

言語地図「-ダラの分布」は、中川村各地、伊那市富県、長谷村非持山、辰野町小野（以後、上伊那の4調査地点と呼ぶ）においての壮年層の「体言+ダラ」の分布を表わしたものである。-ダラの分布の変遷が分かるように馬瀬（1992：774）の言語地図「そうだろう」を転載し、そこに上伊那の4調査地点の-ダラの分布図を加えた。また下伊那の-ダラの分布図も今村（1990：81）の言語地図をもとに筆者がつけ加え、-ダラの上伊那・下伊那の分布状況が概観できるようにした。

馬瀬（1992：774）の言語地図「そうだろう」は主に1974年から1978年にかけての長野県全域の言語地理学的調査による。「そうだろう」を何とつかという問いに対しての結果を言語地図に示したものである。

今村（1990：81）の言語地図は1985年の下伊那全域を対象にした推量形式に関する言語地理学的調査による。「きっと明日は雨だろう」を何とつかという問いに対しての高年層（60才以上）の回答の結果を言語地図にまとめたものである。この地図から「アメダラ」の分布箇所のみ取り上げて、筆者が本論の言語地図「-ダラの分布」に加えた。

「-ダラ」の分布



上記の言語地図「-ダラの分布」は馬瀬（1992）に示された言語地図（下記①参照）をここに転載し、そこに以下の②③を加えたものである。なお、地図の太枠は筆者が加えたもので、伊那地方（上伊那、下伊那）を示す。

①馬瀬（1992：774）図G15「そうだらう」より引用。

②今村（1990：81）長野県下伊那方言地図、地図5「アメダロー」より作成。

③中村（筆者）の1998年の調査による上伊那地方の-ダラの分布。調査地点は中川村（葛島、片桐）、伊那市富巣、長谷村非持山、辰野町小野。

まず、「-ダラの分布」を概観する。1974年から1978年の馬瀬（1980、1992）の言語地理学的調査の時点では、-ダラは愛知県境の下伊那地方の1地点に分布が認められるだけである（ただし、前述のように馬瀬（1980、1992）の1971年～1973年の記述的研究のための調査では、中川村片桐、伊那市富県、長谷村非持山の若年層が-ダラを使用していた旨が報告されている）。1985年にはほぼ下伊那全域に-ダラが分布している様子が今村（1990）の調査から分かる。しかも高年層（60才以上）が-ダラを使用している。1998年の筆者の調査では、ダラの分布は壮年層において上伊那の4調査地点すべてで認められた。馬瀬の記述的研究のための調査（1971年～1973年）では辰野町小野で認められなかった-ダラの分布が今回の調査で認められたことは注目される。

次に、表3～6の上伊那の4調査地点における年代別の推量助動詞の使用状況を概観する。

中川村、伊那市富県、長谷村非持山の3地点では、ゆれは認めつつも、以下のことが言えそうである。高年層では「だろう」相当の推量の助動詞として、用言接続には「用言+ラ」、「用言+ンズラ」を、体言接続には「体言+ズラ」を使用している。用言に直接-ズラのつく「用言+ズラ」も各地域、比較的年齢の高い被調査者に認められる。壮年層では用言接続の場合は主として「用言+ラ」、「用言+ンダラ」を用いている。「用言+ズラ」を使用するのは、長谷村非持山の壮年層男性（番号22）のみである。体言接続の場合は「体言+ズラ」と「体言+ダラ」を併用しつつも、「体言+ダラ」の使用が多い傾向にある。まさに-ズラから-ダラへの過渡的世代と言える。若年層は、用言接続の場合は「用言+ラ」、「用言+ンダラ」を、体言接続の場合は「体言+ダラ」を用いていると考えられる。若年層で-ズラを使用すると答えたのは長谷村非持山の女性（番号29）のみであったが、彼女は-ダラも併用している。全体的に-ラは全年令層で用いられている。-ズラ（-ンズラ）は高年層と壮年層、-ダラ（-ンダラ）は壮年層と若年層で用いられており、年代別に使用が分かれていると言える。

辰野町小野では推量助動詞の使用状況に上記の3地点と異同が認められる。高年層が用言接続で「用言+ラ」、「用言+ンズラ」を使用し、体言接続で「体言+ズラ」を使用している点、壮年層、若年層で用言接続に「用言+ラ」、「用言+ンダラ」、体言接続に「体言+ダラ」を使用している点は他の3地点と共

通している。しかし、壮年層、若年層において「体言+ズラ」、「用言+ンズラ」の使用が活発である点が他の3地点と異なっている。また-ズラに直接に用言のつく「用言+ズラ」がすべての年代で使用されている点も他の3地点と異なっていると言える。つまりこの地域では-ズラは「体言+ズラ」、「用言+ズラ」、「用言+ンズラ」の3つの承接法がある。一方、-ダラは「体言+ダラ」、「用言+ンダラ」の承接法があるのみである。-ズラから-ダラへの交代の要因として承接が似ていることがあるが、辰野町小野ではこのように-ダラが-ズラの承接を包摂しない。このことが、-ズラと-ダラが交代せず、壮年層と若年層で併存している理由の1つかもしれない。

また馬瀬(1980、1992)の1971年～1973年の記述的研究のための調査の時、辰野町小野においては報告のなかった-ンズラが全年令層で使用されていたことは注目される。その中で高年層男性(番号30)は形式名詞「ン」の介した形式を一切使用していない。「用言+ズラ」が辰野に分布していることと関わりがあるように思われるが、これは今後の課題としたい4)。

全地域において-ンズラと-ンダラの使用は、-ズラと-ダラの使用にほぼ平行していた。つまり-ズラを使用すると答えた被調査者は-ンズラも使用し、-ダラを使用すると答えた被調査者は-ンダラも使用する。-ダラは使用するが-ンダラを使用しないと答えたのは中川村高年層男性(番号1)、長谷村非持山壮年層男性(番号23)、辰野町小野壮年層男性(番号33)である。辰野町小野壮年層女性(番号35)は-ダラは使用するが、-ンダラは使用するかどうか分からないと答えている。-ンダラは使用するが-ダラは使用しないと答えた被調査者は中川村若年層の女性(番号10)であった。-ダラと-ンダラの使用のゆれは、ひとつには-ダラが新しい形式であることを示していると思われる。

4. おわりに

上伊那地方の中川村、伊那市富県、長谷村非持山において、-ズラが主として高年層、-ダラが壮年層、若年層で使用されていることを考えると-ズラと-ダラは近い将来交代するように思われる。ただし、辰野町小野においては、-ダラと同様、-ズラも壮年層、若年層で使用されている。この地域での-ズラ

と-ダラの今後の動向が注目される。

今回は調査地点が少なく、-ダラの上伊那地方全体の分布は示せなかった。しかし辰野町小野において1971年から1973年にかけての馬瀬（1980、1992）の調査で見られなかった-ダラが分布していることが今回の調査により明らかになったと思われる。

【注】

- 1) 上伊那地方は行政的には長野県の南信地方に属する。南信地方は大きく諏訪地方と伊那地方に分けられ、伊那地方はさらに上伊那地方と下伊那地方に分けられる。馬瀬（1992：448）によると、「方言の上では、南信地方を1つの方言地域として一括するには無理があり、諏訪地方と上伊那の大田切川以北の方言は、中信方言に、大田切以南の方言は、木曾鳥居峠以南の方言とともに南信方言に入れるのがよいと考える。なお、駒ヶ根市は、天竜川の西の地域は南信方言に属するが、東の地域つまり中沢や東伊那の地域は中信方言に属する」とされている。上伊那方言は中信方言と南信方言の漸移地帯的性格を持っていると言える。
- 2) -ダラが一概に愛知県、静岡県から入ってきた新しい語とも言えないことは今村（1990：80）に指摘されている。愛知県、静岡県に近い下伊那地方南部で関係のありそうな推量の助動詞の-ダラズが使用されているからである。また馬瀬（1980：213）は、-ダラズの分布の中心は北信であるが、その勢力が東信、中信に向かっていることを報告している。特に中信地方に隣接する辰野町小野の-ダラの分布を調査するにあたり、この-ダラズとの関係も考慮に入れる必要があると思われる。今後の課題としたい。
- 3) 用例は次の談話資料を使用した。
1991年11月29日に長野県伊那市Y高校にて、2年生（上伊那出身者）に男性8名、女性8名で同性同士のペアを作って会話をしてもらい、テープ録音した。録音時間30分。それを文字化した談話資料。
- 4) 辰野町小野の高年層女性（番号32）に聞き取り調査をした時、次のような話を聞かせて下さった。「若い頃、親戚に連れられて電車に乗って東京に行った。その時、親戚のお姉さんにズラは使わないように言われた。それで電車に乗っている間ずっと黙っていた。駅について降りる時におもわず「ここで降りるずら」と聞いてしまった。」この「降りるずら」は「降りるんでしょう」の意味であると思われる。つ

まり「用言+ズラ」は形式名詞「ン」の意味も含んでいることが考えられる。

【参考文献】

今村かほる（1990）「推量形の表現価値に関する試論—長野県下伊那郡方言「ラ」「ズラ」と「ダロー」「ノダロー」との比較をめぐって—」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』1

江端義夫（1977）「中部地方域方言の推量表現の分布について」『国語学』110

馬瀬良雄（1980）『長野県 上伊那誌 民俗篇下』上伊那誌刊行会

———（長野県編）（1992）『長野県史 方言編』社団法人長野県史刊行会

【付記】

調査に際しましては、たくさんの方々のお世話になりました。特に被調査者の皆様、教育委員会及び中学校の先生方には貴重なお時間をさいて調査にご協力頂きました。ここに心から感謝申し上げます。

（なかむら じゅんこ 信州大学大学院修士課程在学）